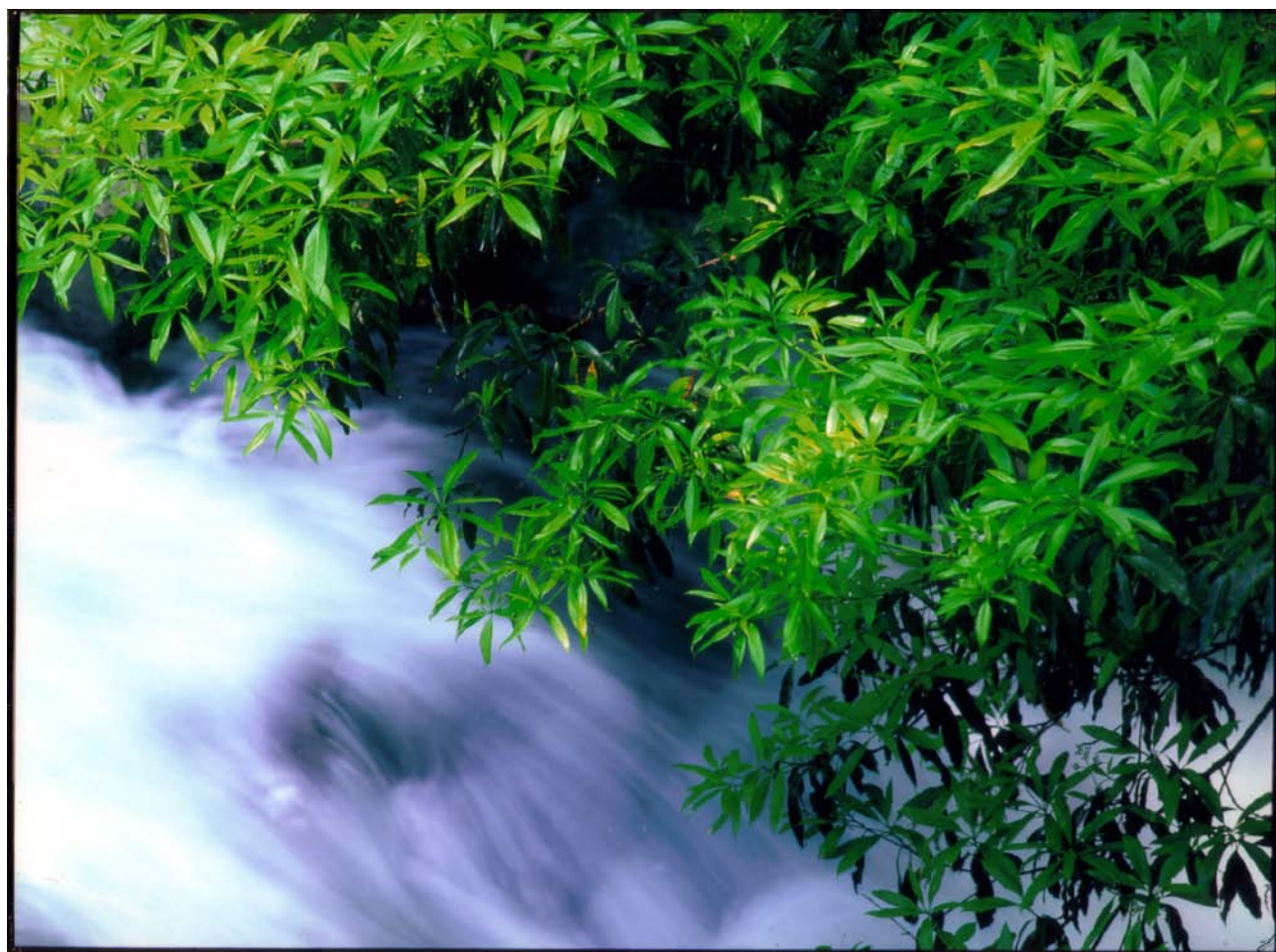


照葉樹林だより

ISSN 1880-8794

てるはの森の会会報 第12号
2008年8月20日



沢水 沢の水はどこで出会っても清浄な感じがするものですが、大森岳周辺ではこのところ沢水が減っているように見え、気掛かりです。

撮影 2002年7月 綾北川沿いの沢で 坂元守雄

《 目 次 》

- ☆ 照葉樹林文化シンポジウム 2008 に参加して
- ☆ 第2回照葉樹林研究フォーラム
- ☆ 綾町上畑地区で「ふれあい調査」はじまる！
- ☆ 綾の沢調査② 流量の測定と県道の通行止め
- ☆ トピックス 地域づくりワーキンググループ
- ☆ 事務局だより

発行：てるはの森の会

〒880-0014 宮崎県宮崎市鶴島2丁目9-6 みやざき

NPOハウス403号

TEL 0985-35-7288 / FAX 0985-35-7289

E-mail: teruha@miyazaki-catv.ne.jp

URL: <http://www.teruhanomori.com>

照葉樹林文化シンポジウム2008に参加して

照葉樹林文化シンポジウム実行委員 小野 明日香

4月某日、照葉樹林シンポジウム実行委員会が結成されました。過密なプログラムを何度も何度も調整し、5月頭ようやくチラシとポスターが完成。「残り約1ヶ月で500人を集める」無謀と思われるながらも、それぞれがむしやりにチラシとポスターをばらまきました。

会場は「綾町公民館文化ホール」1階席だけで500人を収容できる会場でした。緞帳は今回のテーマにぴったりの、迫力ある色とりどりの照葉樹林の模様でした。ロビーは「赤江浜を守る会」「てるはの森の会」など、協賛団体の展示で埋め尽くされ、坂元守雄さんの写真展も開催され、綾の森一色。

そんな会場で迎えた当日、誰もが驚いた、人、人、人！9時開場という早い開催時間にも関わらず、1階席は次々と参加者で埋め尽くされていきます。スタッフ皆が驚きと喜びを隠せずいました。そして開演。宮崎ネイティブシンガーのhouちゃんが舞台に現れます。



はじまりの歌・hou

歴史と価値ある森のなかで、優しい歌声に抱かれる、きっと会場の皆がそんな気持ちで聞いていたでしょう、涙を流す人もいました。

そして更に心をつかんだのが、綾の中学生によるスピーチ。1992年の環境サミットで、当時12歳だったセヴァン・スズキが各国の代表を前に語ったものでした。「どうやってなおすかわからないものを、壊し続けるのはもうやめてください」中学生2人がセヴァン・スズキの言葉を借りて、セヴァン・スズキが中学生2人の声を借りて、訴えました。

開演してから私語はほとんど聞こえません。参加者の視線はステージに集中し、次のプログラムの座談会も大事な役割を果たしました。そしてメインゲスト、日本熊森協会会長森山まり子さんの講演が始まりました。優しく、力強い口調で訴えます。「動物と植物が見事な共生関係の

うえに森をつくっている」「どのひとつがかけても維持できません」初めて聞く日本の現状に、参加者は驚くばかり。

座談会のパネラーは、森山まり子さん、西都市ロキシーヒルの図師哲雄さん、綾町を治める前田穰町長、宮崎森林管理署長の笹岡哲也さん、若者代表は宮崎大学の古川裕貴くん。コーディネーターは郷田美紀子さんが務めます。立場が違くと、こんなにも意見が変わるものか、と驚かされました。パネラー自身も、物事を違った目線から見ることができ、いい機会となったことでしょう。



座談会「未来への種まき」

全てのプログラムが終了すると、会場を出て、綾の森に向かう。綾の木々はどれも立派に天に向かってのびどしりと構えていました。そのひとつひとつが重なって生まれたトンネルをくぐり歩を進めます。途中で大雨が降りましたが、樹の下にいると重なった葉が傘の代わりになり、体が濡れません。これは森の恵みのひとつだと感じました。

参加者それぞれが、1日を通して得たものは計り知れないでしょう。その想いをぜひ、伝えていただきたい。どうか忘れないでいただきたい。梅雨を迎えるはずの6月1日、予想外の快晴と、予想外の参加者の数。このシンポジウムでは人と人とのつながり、スタッフ1人1人の強い想いが成功に結びついたと感じました。でもこれで満足し、終わらせてはいけません。わたし自身も今まで知りませんでした…。動物・植物・空・山・川・海、全てがつながっていること。たったひとつ欠けても美しい自然は維持できないこと。それは学校では教えてくれません。この時代に生まれたわたしたちがどう動くか、それが地球の未来を握っています。未来は変えることができます。明日からどう動こう？

(おのあすか・宮崎市)

第2回 照葉樹林研究フォーラム

ー100年後の森をめざしてー 開催報告

会員 坂元 守雄

照葉樹林研究フォーラム実行委員会、てるはの森の会主催、綾町共催による2008年の第2回照葉樹林フォーラムは「100年後の森をめざして」というテーマで、6月21日と22日の予定で綾町サイクリングターミナルで開催されました。

21日の各研究者による調査・研究発表には、会場をほぼ埋める約90人の一般参加があり、興味深い研究発表に加えて、会場からの活発な発言もあって、終始、緊張感のある真剣なフォーラムとなりました。



午前10時、てるはの森の会の上野代表の開会挨拶に続いて、木佐貫ひとみさんの司会で、研究者の発表がすすめられました。当日、発表された研究者と発表題名を記しておきます。高鍋自然愛好会の石井正敏氏「写真で見る綾北川支流曾見川のトロッコ軌道の歴史」（説明は林裕美子さん）、宮崎大学農学部の高木正博氏「森林の持つ水質形成機能」、東京大学愛知演習林の蔵治光一郎氏「過去90年間における綾南川・綾北川の流況の変化」、宮崎県森林技術センターの福里和朗氏「再生林放棄地の実態について」、静岡大学教育学部の小南陽亮氏「綾照葉樹林における鳥による樹木の種子散布」、南九州大学環境造園部の北川義男氏「綾町の景観形成と照葉樹林」。

以上の内容による研究者の発表を午後2時まで継続した後、総合討論として全研究者と会場参加者による合同意見交換がおこなわれました。

全体的に振り返ると、研究発表はテーマとして示された「100年後の森をめざして」に必ずしも沿うものだけではありませんでしたが、それでも、発表された

内容は、トロッコ軌道の歴史的写真にしても、森の水質形成にしても、綾南・綾北両河川の流況にしても、

裸地の実態や復元策にしても、鳥の種子散布にしても、綾町や照葉樹林の景観形成にしても、一般参加者からも高い関心を持たれる内容ばかりであったと思います。各研究者の発表の都度、会場から質問や意見が出されたのはそのことを表していたと思います。また、綾の照葉樹林プロジェクトに関っている者にとっては、とくに、新たな知見、身近な問題や提言、取り組むべき課題を提示していただいたことになり、今後の活動に生かすべき貴重な内容だったと受け止めています。

次回を展望し、若干の反省もしておきたいと思います。テーマがあれば、研究発表はそのテーマに関連する内容にし、さまざまな角度から同じテーマを考えるフォーラムにした方が、焦点が明らかになり、内容も深まるのではないかと思います。テーマ中心であれば、今回の総合討論で話題が分散したようなことは避けられ、内容的にもっと深められたのではないかと思います。

もう一点は、一般参加者も研究者も、立場や考えの違いがあり、異なる意見も多々あると思われます。その主張や違いが出てくるような意見交換の深まりがあれば、主張点は明らかになり、焦点は深まると思われます。意見交換が率直にできるフォーラムにしたいものだと思います。

今回の会場では、研究フォーラムの要旨集が作成され配布されました。また、昨年の「2007照葉樹林フォーラム発表記録集」が頒布されました。これらの冊子は実行委員会の作成によるもので、その労を多したいと思います。実行委員会では、今回の研究フォーラムの発表記録も作成する予定と聞いていますが、これらは綾の照葉樹林プロジェクトにとって、これからの活動をすすめるうえで有用な教材となり、課題の確認ができる貴重な財産になるものです。今後の活動をすすめる中で、活用していくことを心掛けていきたいと思ひます。

2日目の22日は、大森岳南東稜の南斜面にあるヒノキ林の伐採跡地に植林した照葉樹林の見学を予定していたところ、綾町近辺では19日から22日にかけて200ミリを超える降雨があり、とくに22日の夜半には1時間に34ミリもの激しい降雨のため当日の入山は危険で、見学は中止せざるを得ず、残念な結果になりました。

(さかもともりお・宮崎市)

照葉樹林が支える綾の自然と暮らしの良い関係を続けるために

～綾町上畑地区で「ふれあい調査」はじまる！

(財) 日本自然保護協会 開発法子

身近な自然の価値

子どものときに日が暮れるまで遊んだ原っぱ、夏には泳ぎ魚を採った川、山菜採りをした裏山など、生活のすぐ傍らにある身近な自然は、私たちにふるさとの風景を思い起こさせてくれます。

このような自然は、たとえ、学術的に貴重な自然、レッドデータブックに載っている希少な生き物がある、というわけではないけれど、地域の人たちにとって、いつまでもそこであってほしいと願う大切な場所といえます。最近注目されている里やまは、その代表ともいえる自然です。

しかし、これまでは、里やまのような地域にごく当たり前にある見慣れた自然を開発計画から守ることは、ほとんど叶わずにきました。日本の自然保護制度では、自然の科学的、学術的価値の側面に重きがおかれており、このような地域の歴史や人々の思い、文化が詰まった身近な自然の価値が評価されることはほとんどなかったからです。

一方、1990年代になると、市民やNGOによる里やまの保全活動が各地で盛んに行なわれるようになりました。日本自然保護協会の調査では、2002年には全国で1000を超える市民による活動があることが分かりました。



市民による里やま保全活動分布 (2002年)

これは、経済優先の社会がもたらすさまざまな弊害への反省を背景に、市民の憩いの場、子どもの遊

び場としての身近な自然への関心が高まり、その保全の必要性が広く認識されるようになってきたことの表れと考えられます。里やまだけでなく、干潟や海岸、川辺等の保全活動も活発化しました。

「ふれあい調査」とは

このような背景を受け、1997年に施行された環境影響評価法では、「人と自然との豊かな触れ合い」という身近な自然を評価する項目が盛り込まれました。そこには、「地域住民等の日常的な自然との触れ合い活動への影響を把握する」とあります。これは言わば、開発を行なう際には、地域の人たちの自然とのかかわりや自然に対する思いを把握し、それを損なったり、支障をきたすことのないよう配慮するというものです。つまり、地域住民の意見や思いをよく聞いて計画に反映させること、と言い換えることができます。

しかし、現行の環境アセスメントでは、公園の利用者数や、釣り人の人数を調べる程度に留まっており、本来の機能を果たしていません。その結果、里やまや干潟などの保全を望む人々の声が開発計画に反映されることはほとんどない状況です。

環境アセスメントに限らず、地域づくりにおいて市民参加が謳われて久しいですが、残念ながら市民の思いや意見を十分に掬い上げ、反映させていくことができているとは言い難い実情です。そこで、私たちは常日ごろから地域の自然に対する人々の思いやかかわりを掘り起こし、データ化する「ふれあい調査」を立ち上げました。

「ふれあい調査」では、地域の人たちの土地の自然に対する思いや、生活での幅広いかかわりを明らかにして、みなで地域の価値を再発見します。「ふれあい調査」は、地域の自然の保護と利用のあり方など地域のありようを決めていくプロセスで、ふれあい調査データを自然科学的なデータとともに、将来の地域のあるべき姿を考える基礎資料として活用することを目的としています。

地域での人と自然との日常的なかかわりの中には、持続的にその自然を利用していく知恵や工夫、地域文化の素が包含されています。多様な生物と共存した持続可能な社会を築くには、地域の人と自然の豊かなかかわりの中にこそ学ぶべきことが多いのです。

綾町上畑地区でのふれあい調査

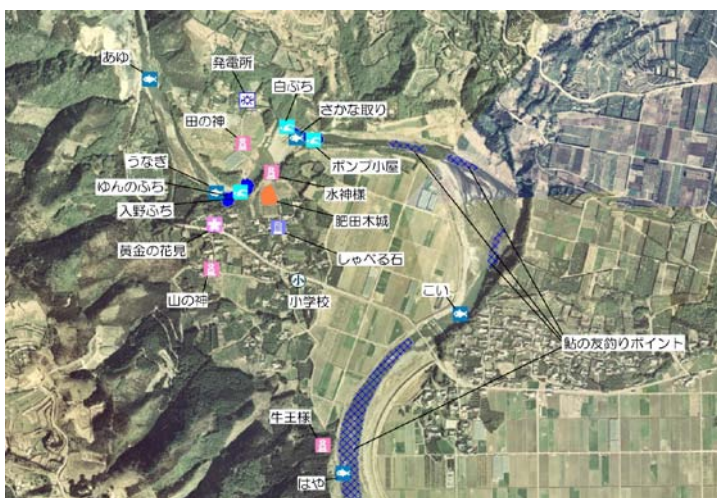
綾の照葉樹林プロジェクトは、まさに照葉樹林の保護・復元を軸にした自然と共存する持続可能な地域づくりであり、地域の人たちの参加が不可欠です。プロジェクトがスタートして3年。プロジェクトの目標達成に向けたさまざまな事業が本格化してきました。それらの活動に地域の人たちの思いや地域の歴史、文化、知恵をいい形で反映させていく必要があります。



懇談会風景（上畑公民館）

そこで、2008年4月、照葉樹林地帯に最も近い綾町上畑地区で「ふれあい調査」をスタートさせました。これまで、地区の人たちから地域での自然とのふれあいにはどのようなことがあったかを聞くアンケート調査を実施し、みなで集まってふれあい体験を出し合う懇談会を2回開催しました。

その結果を集計し、地図に示したものが下記です。



身近な綾南川で泳ぎ、さまざまな魚を採った体験が最も多く出されました。照葉樹林は集落とは距離が

あるためか、日常生活での直接的なふれあいは少なかったのですが、「照葉樹林はあって当たり前」と地区の人たちが発した言葉が、豊かな森があるからこそその里の自然とくらしであることを物語っていると思われました。

今後は、いつ、どこで、どんなふれあいがあったのかを、聞きとりや現地を歩きながら詳しく調べ、それを地図に表示した「ふれあいマップ」を作る計画です。「ふれあいマップ」ができればそれをみなで眺め、マップに表された地域の大切なふれあいをどう守り活かせば、照葉樹林と共存した地域であり続けられるのかを考える資料にしたいと考えています。

郷土学習、環境教育への活用

「ふれあいマップ」は、地域の自然と、自然とかわりながら営まれてきた暮らしや歴史・文化といったふれあいを多くの人と共有し、再認識できる道具として活用できるものです。子どもたちの郷土学習や環境教育の場で活用することを視野にいれ、活動に取り組んでいます。

上畑地区ふれあいベスト9		
1	川・綾南川・きれいな川(水) 川のせせらぎ	20
2	魚とり・アユ釣り	11
3	レンゲ(畑)	10
4	川で泳ぐ・水泳・川遊び	7
	鳥・小鳥(鳴き声)	7
5	ミカン・山ミカン(ミカンジュース)	6
6	菜の花(畑)・菜種	5
	味噌・味噌汁・(ピーナツ味噌)	5
7	田んぼ	4
	牛・馬・とり(家畜)	4
	草・草花	4
	冬の寒さ	4
8	カエル・カジカ(鳴き声)	3
	セミ(鳴き声)	3
	人の声	3
	風(音)	3
	薪・木を燃やす・たき物	3
9	秋祭り	3
	山	2
	照葉樹林	2
	サクラ・ヤマザクラ	2
	麦	2
	堆肥	2
	木	2
	ホタル	2
	キンモクセイ	2
	キイチゴ・野イチゴ	2
	つらら・氷	2
	つばな	2
	さとがら	2
	冷汁	2
あくまき	2	
踊り	2	

(かいはつりのりこ・東京都)

綾の沢調査 ②

流量の測定と県道の通行止め

会員 林 裕美子

森を頻繁に歩く知人から、植林地から流れ出る沢は涸れている場合が多いように感じると聞きました。本当にそうなのでしょうか。綾の森で、照葉樹自然林と針葉樹人工林の沢の流量を毎月1回測った結果からは、夏の豊水期には人工林の流量が多く、逆に冬の渇水期には自然林の流量が多いという結果が得られました。しかし、この2ヶ所の沢は、綾南川をはさんで対岸にあるため、日当たりや地盤の傾き具合が同じではありません。この結果だけから照葉樹自然林のほうが保水力があるとは言えないことを森林水文学の先生方（宮崎大学 高木正博先生、東京大学 蔵治光一郎先生）に教えてもらいました。

そこで、綾にたくさんある沢の流量を短期間で測って回り、それぞれの沢の植生（集水域の植生）と流量に関連性があるかどうかを見てみました。綾は、照葉樹の森で知られるようになってきましたが、針葉樹の植林地もたくさんあります。そして具合の良いことに、植林された区域が正確に把握されていて、それらの森から流れ出る沢は、綾南川と綾北川沿いの県道の脇に本流への流出口があります。一昨年（2006年）の11月に、測定器材を車に積んで県道を走り、2日間でこれら2本の川に注ぐいくつかの沢の流量を測って回りました。



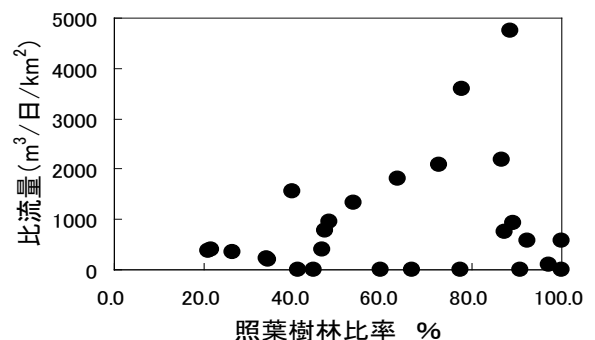
綾北川に注ぐ沢の調査風景(2007年11月)

集水域の照葉樹林の割合と流量の関係をみたものが右下の図です。それぞれの沢の点は右下半分にかたまりました。人工林が多い沢で流量が多いところはなく、照葉樹林の割合が多いほど（右へいくほど）、流量の多い沢が多いことを示しています。冒頭の知人が感じたことは、少なくとも11月

の渇水期には正しいようです。照葉樹林の割合が多くても流量が少ない沢があるのは、水が地盤にしみ込んで表面を流れていない（伏流している）ためだと考えられます。夏の豊水期にもこれらの沢で測ってみたいと思っています。それぞれの沢の点が図のどこに現れるのか楽しみです。

多数の沢の流量を短時間のうちに測って回するには、川沿いの県道の存在がとても重要です。ところが3年前の台風の襲来以来、綾北川沿いの県道は、がけ崩れのために通行止めになっています。通行止めの区間には、流量を測りたい沢がいくつもあります。一昨年（2006年）の11月に綾北の奥の曾見川沿いの沢の流量を測ったときには、小林市から輝嶺峠を越えて、片道3時間かけて調査に行きました。地元の市民として調査に行くには、ちょっと遠い距離です。いくつもの沢の測定をしたいのに、調査地に居られる時間も限られてしまいます。

崩壊箇所の復旧工事は昨年終わったので、県道は車両が通行できる状態になっているようですが、落石防止ネットを張る工事が終わらないために、未だに通行止めです。通行止めになる以前から綾北の原生に近い森から流れ出る沢に設置してあった温度計を回収するために、昨年（2006年）の11月に許可をもらって通行させてもらいました。通行止め区間の奥にある曾見川から伐採木を搬出するトラックも、許可車両として通っていました。開通予定が今年（2007年）の3月ということだったので、調査計画を立てて心待ちにしていたのですが、宮崎県高岡土木事務所に問い合わせところ、また、12月以降に延期になったということです。早く通行止めが解除になってほしいと心待ちにしています。



照葉樹林の比率と沢の流量の関係

(HAYASHI 英語サポート事務所・はやしゆみこ・宮崎市)



地域づくりワーキンググループ始まる!

6月20日、綾の照葉樹林プロジェクト内に「地域づくりワーキンググループ」(以下地域づくりWG)が発足した。この地域づくりWGは、当プロジェクトに多くの人々が参加するための仕組みづくりを協議することが目的で設立された。今後月1回のペースで開かれ、最終的には意見を提言としてまとめ、連携会議に提案することを目指している。

委員の皆さんは綾町地域住民を中心に、学識経験者として宮崎大学教育学部准教授 根岸裕孝氏を加えた9人で構成されている。今後必要に応じ、新メンバーを増やす事も検討されている。

基本的に毎月第1木曜日午後7時より、綾町役場会議室にて開催。毎回、綾プロ協定者5者から講師を迎え、40分ほどの講話をうけ、綾の照葉樹林プロジェクトへの理解を深めながら、その後いろいろな問題を自由に討議する、という形式で行われている。



第8回連携会議での委嘱式の後

本会議に興味のある方、綾の照葉樹林プロジェクトをもっと知りたい!と思う方、是非見学においでください。

問い合わせは、てるはの森の会事務局または綾町役場企画財政課 大島まで。

地域づくりWG委員の皆さんをご紹介します。

地域づくり WG 委員名

	氏名
1	根岸 裕孝
2	黒木 幸明
3	上水流 智生
4	小西 俊一
5	長峰 栄子
6	福田 正照
7	日高 幸一
8	永山 倫太郎
9	月脚 祐子

敬称略・順不同

●地域づくりWG委員からのメッセージ 「地域づくりWG委員になって」

- ・綾の町民のみなさんの率直な意見を聞くことができ、参加できて良かったと思います。(根岸委員)
- ・プロジェクトに町民の皆さんも来てみらんね。(黒木委員)
- ・(てるはの森の会)に参加させていただいて、ありがとうございます。今後も何かのお役に立てればと思っています。(上水流委員)
- ・温暖化防止 まずできることから頑張ろう(日高委員)
- ・あの山を残すのは、公民館の住民の智恵の出どころだというのが見えてきた。(永山委員)
- ・自分に何ができるかまだ全くわかりませんが、綾という宝物の原石がもっともっと磨かれて輝くようにできることを動いていきたいです。(月脚委員)

事務局から

◆「てるはの森の会」関連行事

- 7月 3日(木)第1回地域づくりWG
12・13日(土・日)北郷町森林ガイド養成講座
15日(火)連絡調整会議
19日(土)ピザハット北海道体験ツアー視察
22日(火)てるはの森の会定例会
26・27(土・日)林野庁長官綾視察
- 8月 7日(木)第2回地域づくりWG
19日(火)てるはの森の会定例会
23日(土)第2回北郷町森林ガイド養成講座
23日(金)沢調査
28日(木)連絡調整会議・第3回地域づくりWG
- 11月 14日(金)第9回連携会議
15日(土)第5回間伐作業

◆井出林野庁長官来たる！

7月26日(土)に井出道雄林野庁長官が、宮崎県高千穂町から、椎葉村を視察された後、夕方綾町に入られました。



左側が井出道雄長官、右は説明役の河野耕三先生

翌27日(日)川中神社入口のイチイガシの巨木と、綾照葉大吊橋を見学され、照葉樹林文化館でそれぞれの担当者から、綾の照葉樹林プロジェクトについての説明をお聞きになりました。

「現場に行かないと解らないことはたくさんある、若い人にも現場に行くよう勧めている。出張で駅前のホテルに泊まるな、旅館に泊まり地元の人と天気の話でもいいから会話しなさい。」とおっしゃっていました。

短い時間でしたが、照葉樹林の素晴らしさ、綾プロの現状をわかっていただけたでしょうか。

照葉樹林だより12号(2008年8月20日発行)

◆第5回照葉樹林復元除伐作業

～ 伐採作業ボランティア募集 ～

○人工林を適宜伐採することにより、自然萌芽による照葉樹林への復元のお手伝いをするボランティアです。

日時 2008年11月15日(土)9:30～13:30

集合場所 川中キャンプ場駐車場

9:30……集合

10:00……作業開始

12:15……作業終了後昼食(弁当)

13:30……解散

○主催 九州森林管理局

特定非営利活動法人 宮崎文化本舗

○協力 てるはの森の会・綾照葉樹林プロジェクト

○持ってくる物

お弁当・飲み物・タオル・軍手(滑り止め付き)

○服装 長袖・長ズボン・軽登山靴(滑りにくいもの)

○道具は事務局で準備します。

◆申込及び問い合わせ先 てるはの森の会事務局

〒880-0014

宮崎県宮崎市鶴島2丁目9-6みやざきNPOハウス403号

TEL 0985-35-7288 / FAX 0985-35-7289

E-mail: teruha@miyazaki-catv.ne.jp

会員募集中！

「てるはの森の会」では、綾の照葉樹林プロジェクトにご協力いただける会員を募集しております。

年会費 個人サポート会員 2000円

家族サポート会員 3000円

団体サポート会員 5000円

法人サポート会員 10000円

会員になっていただくと、照葉樹林やプロジェクトに関する情報を掲載した「照葉樹林だより」を年4回お届けします。プロジェクトが実施するイベントや各種行事に参加できます。

詳細は事務局までお気軽にお問合せください。

協賛企業



オーブ・ピザ財団
公益財団法人オーブ・ピザ財団は、日本国内で最も
早くピザ事業を営み、社会に貢献しています。

